

育児期の夫婦の役割葛藤に関する研究 (2)

—とくに有職の妻と専業主婦の場合—

○丸山尚子
(徳島大学)

浜田美穂

太田暁子
(徳島大学)

竹内佐有理
(高松市役所)

<研究の目的>

本研究は育児期の夫婦が経験する役割葛藤に関して、前回に引き続き報告するものであるが、今回は役割葛藤の最も高かった有職の妻と最も低かった専業主婦の妻の詳細について中心に報告する。

なお、前回までに確認されたことは以下の4点である。

(1) 「就業者役割」、「配偶者役割」、「親役割」の3つの面での役割遂行における役割葛藤について、有職の妻と専業主婦の妻、専業主婦を妻に持つ夫、有職の妻の夫においてどう違うかを検討した結果、役割葛藤は有職の妻において最も高く、専業主婦において最も低かった。

(2) 「就業者役割」、「配偶者役割」、「親役割」について、役割行為者に内在化された役割規範(社会通念として社会から期待されていると感じる役割行動、配偶者から期待されていると思う役割行動、自分が理想とする役割行動)と現実の役割行動との「ズレ」に着目し、この「ズレ」が役割葛藤にどう関わるかを検討したところ、規範>現実の群(規範高群・プレッシャー群)において役割葛藤が有意に高く、規範<現実の群(現実高群・自負群)においてもっとも低かった。

(3) 役割葛藤はまた、主観的自己評価としての「満足」にも関わり、「満足」はとくに役割葛藤を軽減させる役割を果たすものと考え、検討した結果、「満足」は役割葛藤を軽減させ、「不満足」は役割葛藤を増幅させるものであった。図1は以上の結果の概略を図示したものである。

(4) ところが、有職の妻においては、しばしば現実高群において役割葛藤が有意に高くなる場合がみとめられる一方で、専業主婦においては、群間の差があまりみられなかった。さらに「満足」による軽減効果は有職の妻においては有効であったが、専業主婦においてはあまり有効ではなかった。というように、妻たちの間でも「立場」によって大きな違いがみられた。

以上によって、有職の妻と専業主婦の妻についてさらに詳細に検討することが本報告の目的である。

<方法>

(1) 調査対象者

徳島市内の私立と公立の幼稚園と保育所7園に通う子どもの父親669名、母親689名に調査用紙を配布した。有効回答数は父親352名(有効回収率52.6%)、母親338名(有効回収率49.0%)であった。調査対象者の基本的属性は、平均年齢が父親36.3歳、母親33.6歳であった。父親の一日あたりの平均労働時間は10.2時間で

あった。母親は専業主婦が152名(41%)、フルタイムが100名(27%)、パートタイムが94名(25%)、自営業が29名(8%)で、一日あたりのフルタイムの母親の平均労働時間は8.9時間、パートタイムの母親の平均労働時間は5.2時間であった。

(2) 調査内容と調査用紙の構成

役割葛藤尺度、役割規範・役割行動尺度、役割遂行満足度尺度、心理的性度尺度を内容とする121項目からなる。評定はすべて5段階評定。詳細は以下のとおりである。

①役割葛藤尺度 Kopelman, Greenhaus & Connolly (1983)のWIF(work interference with family)尺度, Burley (1989)のFIW(family interference with work)尺度, Bohlen & Viveros-long (1981)のWork-Family conflict尺度に一部加筆修正したものに、独自に作成した項目を加えた35項目からなる。②役割規範・役割行動尺度 数井ら(1996)による父親の育児参加測定項目、大野・柏木(1991)の母親の性役割観、結婚、家庭に対する意見をもとに加筆修正した項目に、独自に作成した項目を加えた計21項目(家事役割5項目・親役割5項目・就業者役割4項目・協力両立的態度3項目・伝統的性役割像4項目)から成る。これらに関してi)「社会通念(社会が求める夫(妻)・父親(母親)像)」について ii)「あなたの妻(夫)が望むと思われる夫(妻)・父親(母親)像」について iii)「あなたの理想」について iv)「現在のあなた」についての4通りについて回答を求めた。③役割遂行満足度尺度 「あなたはそれぞれの現在の自分(夫・妻としての自分、父親・母親としての自分、職業人・個人としての自分)に、どの程度満足していますか」「妻(夫)は以下のあなた(夫・妻としてのあなた、父親・母親としてのあなた、職業人・個人としてのあなた)にどの程度満足してくれていると思いますか」について回答を求めた。

(3) 調査期間: 1999年5-7月。

<結果および考察>

(1) 有職の妻と専業主婦の妻にみられる役割葛藤

妻に共通して抽出された役割葛藤因子「家庭生活支障感」、「罪悪感」、「せかさされ感」、「家庭役割負担感」に関して、有職の妻と専業主婦について比較すると、最も大きな差がみとめられるのは「罪悪感」(「仕事・活動をしている間子どもがどうしているか心配だ」、「仕事・活動のせいで子どもにすまない思いをしている」、「仕事・活動のせいで自分が親になり切れていない」など)であった。また、「家庭生活支障感」(「私の仕事・活動で家庭の生活が妨げられている」、「仕事・

活動のせいで、家でイライラすることがある」など)においても大きな差がみられ、有職の妻が仕事(就労者役割)と家庭(親役割・妻役割)の間で抱く葛藤の大きさがうかがえた。

しかし、「家庭役割負担感」(「子育てが負担である」、「子どもいると制約される」など)では専業主婦においても葛藤が高く、両者に大差はない。

(2) 規範と現実との「ズレ」と役割葛藤の関連—有職の妻・専業主婦の場合—

多くの場合、規範高群(プレッシャー群)において役割葛藤が最も高い傾向にあるが、先にも指摘したように、有職の妻においては、いくつかの場面において現実高群(自負群)において最も役割葛藤が高い場合があった。その多くは、「自己の理想」より以上に「家事役割」および「就業者役割」を遂行している場合にみられるものであった。つまり、現実の方が、自分が理想とする家事量・仕事量より多い量をこなしている(こなさざるを得ない)という思いを抱いている有職の妻たちにおいて役割葛藤(「家庭生活支障感」、「自責感」)は高くなるのであった。

このように、有職の妻の場合、「社会通念」や「夫の期待」ほどに現実に自分が「家事役割」、「親役割」を果たせていないという思いが強い場合に、高い役割葛藤(「家庭生活支障感」、「自責感」、「仕事支障感」)を経験する一方で、自分の理想より高い「家事役割」、

「就業者役割」を果たしている(果たさざるを得ない)という思いが強いときにも同様な高い役割葛藤を経験するというジレンマの中にいることが推測される。

それに対して、専業主婦においては、ズレとの関連はあまりみられなかった。しかし、自己の理想の「就業者役割」とのズレにおいて、規範高群(もっと活動すべきなのに、あるいは仕事したかったのに出来ていない)において役割葛藤が高い(「子育てや家事が負担」、「子育てや家事のために活動に支障がある」等の「家庭役割支障感」)一方で、伝統的妻・親役割が十分出来ていないという思いの中で(規範高群)、「罪悪感」を高めている傾向など、有職の妻に比較するとわずかなではあるが、ズレとの間で揺れている姿も垣間みられる。

(3) 「満足」との関連

さて、すでに述べたように、高い役割葛藤を経験している有職の妻であるが、妻として、母親として、個人としての今に自己満足している(あるいは夫が満足していると推測できる)と役割葛藤は軽減されることも確かである。しかし、軽減率も増幅率も夫たちほど大きいものではなかった。

満足による軽減が最も大きかったのが専業主婦を妻にもつ夫であったが、専業主婦自身は満足による軽減も不満足による増幅も最も小さく、有意な差には至らない。

以上、妻たちは立場により異なるものの、揺れやジレンマの中で各々に役割葛藤を経験しているといえる。

